

映画の嘘 小林 勝

カメラは正確に対象を写しとると信じられている。なぜならカメラは機械だからである。わかりきったことであるが、機械は機械的に可動する。その間にごまかしの入る余地がない。

それは確かにその通りであって、カメラの性能から見て少しも不思議はないし、不合理な点も全くない。

しかしカメラは自分が動くのではない。必ずそこにカメラを動かす人がいる。それはカメラマンか、そのカメラマンを動かす監督か、またはその監督を動かす製作者か会社か——ともかくもカメラを操作する人間が介在して、撮影という作業がなされる。そこが曲者である！

早い話がニュース映画。

ある事件や事象を、ありのままに撮影したものがニュース映画というわけであるが、もしカメラを操作する人間になんらかの表現意識があったとすると、そのニュース報道は、

必ずしも事象や対象をありのままに捕えたと言えないこともできてくるのではあるまいか。カメラのアングル一つ、ポジション一つの選び方によって、そのニュース情報は或は残酷に見えたり、また或は滑稽に見えたりすることはないだろうか。

カメラが正直に対象を写すということを、今は誰も疑ったりしないのが常識である。けれどもこれは一応疑ってみる必要がある、私に言わせればカメラが正直に対象を写すとい

う常識は、一種の迷信だといいたい。

ドキュメンタリー映画、或は記録映画ともいう。一つの事実を正確に順序よく記録して一つの作品にまとめる——それは確かに作品であるが、事実と作品とは必ずしも同一ではない。事実に対して作者の主観がカメラのレンズを通して見られているからである。それは作者の見た事実であって、ありのままの事実とは言いかねるのではないか。

——いささか意地の悪い言い方でカメラの主観ということを述べて来たが、実際は、カメラに作者の主観を托すればこそ映画は生れるのであって、これが実は映画の特質の一つなのである。

現実の出来事は客観的なものであって、それを作者（映画の場合作者は複数であることが多いが）の主観によって再生されて一つの真実をつかむのである。事実と真実との違いであって、敢えて映画に限らず、あらゆる芸術に存在する関係である。従って作者は現実の出来事には責任を持たないが、作者の真実に対しては責任をもつ。責任のもてる真実がそこにあればこそ、作品は人に感銘を与える

のである。

しかし劇映画ははじめからフィクションであることがわかっており、フィクションの形において真実を訴えるものであるから、カメラがあらのままを写しているか、いないか、ということとはあまり関係がないように考えられている。また、それだからこそノン・フィクションの場合に、そこに表現されているものが、現実のありのままの姿であるという錯覚を起しやすいためである。

映画はフィクションであろうとノン・フィクションであろうと、カメラの主観を通して語られるものなのである。

以上カメラのことばかり述べて、例えばフィルム of の性能の問題とか、編集の方法問題とかにまで言及しなかったが、撮影という作業には、対象を作者の主観によっていろいろに作り変える手段が幾らもある。

要するに人間が機械を使う以上、機械がものを作るように見えて、実は人間が物を作っているのである。

従って観客側から言わせれば、我々はカメラが見せてくれるものしか見ることができな

い。実はカメラが捕えたその裏側を見たいのに、カメラがそれを見せてくれなければそれまでである。

しかしこれは何も映画の世界に限ったことではない。ただ映画は機械という無機物が介在するために起り易い、ある錯覚を常に心にとめておく必要があるかと思うのである。機械を盲信するなということである。

私は今ある特殊な事件をゆくりなくも思いついている。それは第二次世界大戦の時の事であった。

シンガポールが陥落して、山下司令官とパーシバル將軍とがフォード工場の一室で会見するというニュース映画の場面の事である。

無条件降伏するかどうか、イエスかノーか、と山下司令官が問い、イエース、イエースとパーシバル司令官が答える場面であるが、聞くところによると、私も後で見に行つて確認

したが、その場所は光線の入りにくい北東隅の一室であつて、日映のニュースカメラマンは、コマ数を落して撮影したという。標準の

コマ数は1秒間に24コマであるが、それでは暗くてよく撮れないために、幾らかコマ数を

落した。何かコマ落したか、それは聞きそびれたが、とにかくそれを標準の1秒24コマで映写すれば、撮られている人物の動きが多少早くなる。私はニュース映画館でそれを見たが、山下司令官の眼がキラリと光り、イエスカノーかと詰める気迫が鋭く、ために人物がたいへん大きく見えて頼もしかった。これに反してパーシバル將軍は伏眼がちで、詰めよられて多少狼狽気味でイエース、イエースとなづくのである。如何にも戦勝將軍の面目躍如と敗軍の将のみじめさが対比されて、館内は拍手喝采の波であつた。

ところが後に戦争裁判で、このニュース映画が証拠として提出された時、山下奉文の態度が如何にも傍若無人であり、尊大であり、非礼であるという悪印象を連合軍側の裁判官に与えたいらしい。

問題が実はコマ数を落して撮つたという事から来るとすれば、真実とは何か、事実とは何か、ということを考えさせる問題を含んでいないだろうか。

もちろん山下奉文は戦争責任者として絞首刑に処せられたのである。